KAPPA NOVELS

長編推理小説　書下ろし

死体を買う男

歌野晶午（うたのしょうご）

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（〒112-11）
光文社出版局

長編推理小説　死体を買う男

1991年5月30日　初版1刷発行
1991年6月10日　　2刷発行

著者　歌野晶午（うたのしょうご）

発行者　大坪昌夫

印刷者　佐々木明
東京都文京区後楽2-18-8
公和図書

発行所　東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347
株式会社 光文社
電話 東京（3942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（明泉堂製本）
表紙の模様・意匠登録 116613
© Shōgo Utano/Pinpoint Inc. 1991
ISBN4-334-02923-X
Printed in Japan

¥730（本体709）

死体を買う男

歌野晶午

KOBUNSHA

カッパ・ノベルス

死体を買う男　目次

自序……5
白骨鬼（第一回）
断崖 8
奇譚 15
月に吠える 21
第一章……27
白骨鬼（第一回 承前）
天上縊死 39
幽霊 48
第二章……59
白骨鬼（第二回）
朔太郎登場 71
双生児 80
人でなしの恋 87
疑惑 97
屋根裏の散歩者 108
石塊の秘密 117
第三章……131
白骨鬼（最終回）
ぺてん師と空気男 151
指 158
鬼 171
白髪鬼 179
大暗室 188
悪人志願 196
百面相役者 207
大団円 217
第四章……221
白骨鬼（楽屋噺）
恐ろしき錯誤 235
終章……250

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

本文カット　レオ　澤鬼（さわき）

自序

いま私の横に、三百枚からの原稿用紙が積みあげられている。原稿の冒頭には、薄墨色のインクで「白骨鬼」と題されている。

本書の読者諸兄の中には、この時代がかった、ものものしい作品名に心憶えがある方もおいでかと思う。そう、今夏、ミステリー好きにちょっとした話題を提供した、あの探偵小説である。

「白骨鬼」が物議を醸したのは、その、一種奇妙な内容もさることながら、連載の打ち切りにあった。

手元の「月刊新小説」を見ると、「白骨鬼」の第一回は同誌八月号に掲載されている。九月号掲載分の末には、「次号、堂々完結！」とゴシック体で力強く謳ってある。三回という短期集中連載であったわけだ。ところが十月号をひもといても、「白骨鬼」はどこにも見あたらない。編集後記の中に、「都合により休載させていただきます」という事務的な詫び文句が記されているばかりである。

最近の読者は物識りなもので、ああ原稿が落ちたのか、と納得したようだが、しかし「白骨鬼」の完結編は十一月号にも掲載されなかった。十二月号にも、最新の一月号にも。

憤慨のあまり、編集部に抗議の電話をかけた熱心な読者も二、三あったと聞く。編集部はそれに、「よんどころない事情」の一点張りで通したとも聞く。

私はこのたび、その「白骨鬼」の原稿を入手した。完結編もふくめた完全原稿を。

本書は二部構成、いわゆる作中作の形式を採っている。

一つは、むろん、「白骨鬼」の紹介であり、未発表のまま終わっている完結編のみならず、掲載分についても再発表することをあえてしたので、連載一、二回目の内容を知っている方も先を急がず、いま一度読み返して、和製ホームズと知恵較べするのがよかろうかと思う。

さて、もう一つの部分では、私が「白骨鬼」の生原稿を手に入れるにいたった経緯を小説風にまとめてある。しかし、私がこうやって筆を執るのは実に二十年ぶりのこと、文章にも構成にもまったくの自信がない。この序文にしても、恥ずかしい話、もう丸一日ついやしているのだ。

したがって、「白骨鬼」の合間合間に挟んだ私のつたない文章は、読み飛ばしていただいてもいっこうにかまわない。むしろわが恥を思えば、「白骨鬼」部分だけ読んでくれと懇願したいほどである。

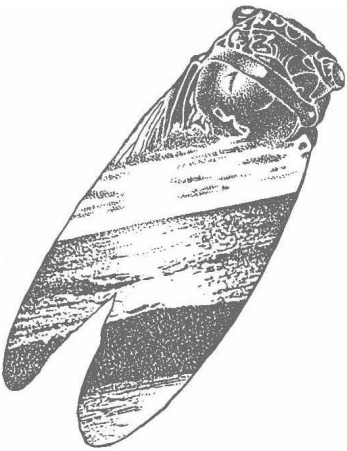
終わりに、本書の実現に全力を傾けてくださった青風社の菅野健一郎君、同社社員一同、そしてなによりも「白骨鬼」の作者に、この場を借りて深く御礼を申しあげた

い。本書はたまたま私名義で出版されているが、大半を占める「白骨鬼」は彼の手によるものなのだ。彼の名誉のためにも、それだけは重々ふくみおきいただきたいと思う。

平成二年　小雪（しょうせつ）の候

細見辰時（ほそみたつとき）

白骨鬼（第一回）



断崖

私は常々思っていることがある。

探偵小説家というものには二種類あって、一つの方は実際型とでもいうか、現実の犯罪事件に興味を持ち、そこから小説の題材を引き出そうとする作家であるし、もう一つの方は妄想型とでもいうか、ひどく夢見がちで、荒唐無稽なおとぎ話の創作にのみ興味を持ち、現実の犯罪事件などにはいっこう頓着しない作家であると。

そして、私自身はまぎれもなく後者に属するのだ。

一昨年より、満州事変、五・一五事件、国際連盟脱退と、わが国の情勢いよいよキナ臭く、それを反映してか、犯罪事件においても、史上に残る血なま

ぐさいものが相ついだ。玉の井八つ切り事件、中野の人妻殺し、大森ギャング事件、アアそれから、海の向こうでも、リンドバーグ二世誘拐事件というたぐいまれな凶悪犯罪が起きた。

そのたびに、私は新聞記者の来訪を受けて、何か意見をと求められたけれど、私は満足に答えられなかったばかりか、あるときには記者に向かって、「それは一体どんな事件なのですか」とアベコベに質問する不体裁まで演じたものである。

私はそれほど、現実の犯罪事件に無関心なのだ。なぜといって、そこにはただ現実の痛ましき苦悩が見え隠れするばかりであって、私の創作慾を少しもかきたててくれぬからである。

そもそも実際上の事件というのは、落ちのない噺も同然で、出発点こそ飛びきり怪奇的であっても、その真相はひどく子供じみていて、意外性の一とかけらもないのが常である。真相究明の過程にしても、偶然と足とが重大な要素であり、純粋の推理がはいりこむ余地はほとんどない。したがって、探偵小説に理智の美を求めている私が、現実の事件から得られるものなど何一つないわけで、興味を持つだけ無駄というものなのである。

ところが、昨年のこと、私はヒョンなきっかけから、現実の小事件にかかわりを持ったばかりか、それにドップリつかる羽目になった。私は最初、その事件にさほど関心を持っていなかったのだが、イヤむしろかかわりを避けていたふしがあるのだけれど、萩原朔太郎兄にひきずられるがまま深入りするにしたがって、小説の仕事がまったく手につかなくなってしまったのである。

奇っ怪な死に様、推理合戦の妙、深夜の大冒険、犯人の叡智、風変りな動機、絶望的な結末、等、等、等……、一々が非常に面白く、恐ろしく、事件解決からだいぶ月日がたった今でも、私の心の中には、当時の記憶が生々しく残っている。思い出すたびにゾクゾクしてならない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

そんなわけで、私は、あのときの体験に多少の潤色を加えて、物語風にまとめ上げたなら、なかなか面白い探偵小説になるだろうと思っているのだが、しかし先にしるしたように、私の昂奮はいまだ覚めやらずといった状態なので、今すぐ原稿紙に向かったところで、とても人様に見せられるような「よそ行き」の文章は書けぬことだろう。

私はだから、今はまだ、この文章を、古い雑記帳の余白へ、心覚えのつもりで書きつけている。原稿紙に向かう前に、「ふだん着」の文章で、思うさま事件を回想しておこうと筆を起こしたのである。

これを書いているのは昭和九年の秋であるが、さて、私とその奇怪な事件とのかかわりは、ちょうど一年前の九月十四日にはじまった。

私はその日、一世一代の大決心を胸に秘めて、紀州の白浜へ、独りぼっちの身柄一つでやってきていた。

彼岸が近いにもかかわらず、妙に白っぽい陽射しが、からだじゅうにネットリとからみついて、まるで大暑のころのように、むしむしと暑い日であった。

私が白浜のはずれ、湯崎の集落あたりで乗合自動車を降りたころには、すでに日が傾いていたけれど、そよぐ風は幽霊のように尻切れとんぼで、一丁ばかり歩くあいだに、脇の下や背筋などが、もうジクジクと汗ばんでいた。

だからであろうか、私以外の旅行者は見あたらず、往来の両側からは、焦げ醤油の香ばしい匂い、アンズ飴の甘ずっぱい香りが漂ってくるけれど、それらの屋台の中には、すでに旗をしまい、縁台を畳みはじめているところもあった。

私は屋台のあいだを足速に通りすぎると、犯罪者のように顧み顧み、ヒッソリと往来をはずれた。めざすは景勝三段壁の突端である。

三段壁につづく二尺たらずの小道はウネウネ曲りくねり、ときには、おい茂る灌木が行く手をさえぎるものだから、長いあいだ惰眠を貪っていた私に

は大そうこたえ、十間歩いては野良犬のように舌を出し、もう十間歩いてはハッハッと肩で息をするといったあんばいで、ようやく頂上に到達したときには、日もなかば暮れかかっていた。

そして私はハッと息を呑んだ。眼前に広がる夕景の、なんと恐ろしく美しいことか。

見渡すかぎり大半球をえがいた紀伊水道と、筋雲のなびく空は、ギラギラとまっ赤に染まっていて、一本松の向こうがわを落ちて行く太陽は、破裂寸前の風船のように、ふくらみ、ゆがみ、一ときとして同じ形を持つことはない。海と空と太陽とが、だんだんと姿を変え、色を変え、境をなくし、それはちょうど、水桶の中に様々の絵具をたらして、それがジワジワと溶け合って行くのを、途方もなく巨大な映画にして、大空にうつし出したような感じであった。

しかし、荘厳な景色に見とれたのは一瞬間のことであって、つと足下を見やった私は、なんとも名状しがたい恐怖におそわれた。

ナタで叩き落としたような断崖、しかもその高さが数百尺もあろうかというから、こうやって立っているだけで、今までの汗がスーッと引いて行って、別のねばっこい汗が、脇の下や足の裏にジンワリとにじんでくる。

ちょうどそのとき、断崖をつたって、一陣の風が吹き上げてきた。

私はあわてて頭を押えたのだが、時すでに遅く、チョコンとかぶっていた鳥打帽はフワリと舞いあがり、崖はなまで伸びた一本松の枝先をかすめ、そのままゆっくり漂い落ちた果てには、海中からそそり立った奇岩にぶつかって、打ち寄せる波に呑みこまれてしまった。海はよく凪いでおり、沖行く蒸気船はユッタリと進んでいたけれど、鳥打帽が落ちたちょうど断崖の裾あたりは、一帯に白く泡立って見えた。

私はもうヤケクソであった。あまりの恐ろしさに、

かえって勇気がわいた。
私は下駄と足袋を脱ぐと、自殺者の常として、それを松の根元にきちんと揃えて置いた。そうして大きく息を吸い込んで、静かに眼をとじた。
だが、一と思いに身を投げることはかなわなかった。
怖くない怖くない、ほんの一とき我慢すれば楽になるのだといい聞かせても、膝頭がブルブルとふるえて、断崖の向こうがわに出て行けないのである。
私はそこで、足の裏を、芋虫や尺取虫の同類になぞらえ、十本の指と二つの踵(かかと)をモゾモゾ動かしてみた。すると果たして、一寸刻みではあるけれど、海に向かって着実に進んで行くではないか。
私は、オオと膝を叩く思いだった。とっさのひらめきにしては、なかなか理にかなった方法である。こうやって進んで行けばいずれ、爪先がとっぱしをはなれ、次に指のつけ根がはなれ、土踏まずのあたりがはなれたころには、私のからだは、自然と、海の方へ傾いていることだろう。なるほど、身投げする者が決まって下駄を脱ぐ理由は、こんなところに存在していたのである。
そうするうちに、裸足(はだし)の指が断崖の終りを感じた。からだがグラリとのめった。
「ウワァッ！」
私はひしゃげた叫び声を上げた。同時に、物凄い力が私に加わって、からだが宙に浮き、アッと思う間に、私は息がつまるほどの痛みをおぼえた。
（オヤ、何か変だぞ）
不思議なことに、肩や背中が異常にズキズキしているものの、意識はきわめてハッキリしているのだ。
「おやめなさい」
その声に、私はソロソロと眼をあけた。すぐそこに若い男の顔が迫っていた。ハッとするような、高貴な感じの美青年である。
「早まっちゃいけません」
彼は低い声でいうと、私の襟首と腰から手をはな

した。私はキョロキョロと顔を動かして、それでようやく、状況を察することができた。
私のからだは、まだ断崖の上にあった。一本松の根元、草の上に横たわっていた。すんでのところで、私はこの美青年に自殺を止められてしまったのである。彼は私のからだを後ろから抱えると、柔道でいう裏投げの要領で、ポーンとうしろに放ったのであろう。
「あ、イヤ、これは……」
私はヘドモド立ち上がった。
「イヤ、その、別に身を投げようと思っていたわけではないのです」
「身投げしない人間が、なぜ、履物を脱ぎ揃えるんですか」
美青年は厳しい調子でいった。
「どうぞ誤解なさらないでください。私は物書きをやっているんですがね、ここは名にし負う身投げの名所でしょう、この断崖から飛び降りる人間は、一体どんな気持になるのかしらと思いましてね。下駄を脱ぎ、絶壁に立ち、眼下数百尺に砕ける波濤を見る、そのとき彼の心をよぎるものは何か……」
「とんでもない」
美青年は、身振り手振りで弁解する私をさえぎって、
「どういうつもりだかは知りませんが、あんなところに立ったらあぶないでしょう。もしも突風が吹いたらどうします。そのつもりがなくてもまっさかさまだ」
と母が子を叱るようにいった。
「はい」
私はみじめな声で返事した。
「死にたくないのに死んでしまう人間もいるんですよ」
美青年は悲しげにつぶやくと、クルリと背を向けて、何度となくこちらを振り返りながら、岩山を下って行った。

私は一本松に寄りかかるようにして、刻一刻とドス黒くなって行く夕焼け空をボンヤリとながめつづけた。頭の中はまったくのからっぽだったようで、われに返ったときには、あたりはすっかり暗くなっていて、沖合には橙色の燈火が、それよりずうっと遠くには、ほこりのような無数の星屑がチカチカとまたたいていた。

私のほかには生きもののけはいはなかった。だが、まるで静まりかえっていたわけではない。一本松は、少しの風も感じられないというのに、ガサガサと枝を揺らし、暗闇の底からは、千々に砕ける波音が、かすかな地ひびきをともなって、ドーンドーンと鳴り渡っていた。

そして、私はゾッと身震いした。六万八千の毛穴がとじて、産毛という産毛が、猫の毛のように逆立った。それは、先ほど断崖の下をのぞいたときに感じた種のものとはちがう、もっと根本的な恐れであった。

私はもう夢中で足袋と下駄をひっつかむと、素足のまま、わけのわからぬことを叫びながら、麓への細道を駈け降りた。

木の根につまずいては倒れながら、走りに走って、そうしてようやく人家の明かりを眼にしたとき、私はあまりの安堵に、クナクナと、その場で腰を抜かしてしまったものである。

奇譚

私はそれから、浜風荘というひなびた旅館に投宿した。むろん本名も筆名も隠して、宿帳には廣宇雷太としるしておいた。

通されたのは、二階の奥まった部屋で、案内の女中が去って行くのを待って、私は、南国特有の、日の匂いの染みついた畳に寝転がった。

私が自殺を思いたったのは、自分自身にほとんど絶望したからである。

その一年半ほど前、つまり昭和七年の三月、私はいくつかの連載物が終ったのと、全集本の印税がはいったのを機会に、しばらく休筆することにした。というのも、私はその当時、理智の追求をスッカリ棚上げして、実入りのよさを理由に、安価な通俗小説ばかり書きなぐっていたのだが、それがホトホトいやになってしまったのである。やはり金よりも夢であった。

私は短篇でこそ、ある程度満足の行く作品を書き残していたけれど、長篇に関しては壊滅状態であった。智的興味はおろか、筋すらろくにないまやかし物ばかりであった。私はだから、どんなに生活を切りつめてもいい、ユックリ考えて、ユックリ筆を執って、西欧風の長篇探偵小説が書きたかった。皇国の万民に、これが本物の長篇探偵小説だと知らしめたかった。

その下ごしらえのために、私は表向き、執筆活動の休止を宣言した。タップリ一年をかけて筋立てを細目まで組み上げ、さらに半年かけて完璧に仕上げる。私の青写真はそうであった。

ところがどうしたことか、一年たち、予定の一年半がすぎても、原稿紙はまっ白け、荒筋さえいっこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton